

鬼子母神（きしもじん）

令和2年5月第2週放送

まず、読み方について、母の音読みは、通常「ぼ」となりますので鬼子母神を「きしぼじん」と読むことがあるかと思えます。間違いではないのですが、仏教では、母の字を「も」と音読みしますので、今回は「きしもじん」で統一します。

鬼子母神は、仏教を守護する女神で、安産や子育ての神としてまつられています。もとは「ハーリーティー」と呼ばれた^{やしや}夜叉でした。夜叉とは、インド神話における鬼の神のことです。

実はこの夜叉、たいへんな子沢山で、その数五百人とも一万人とも言われています。鬼子母という名前は、鬼神の子の母ということからつけられたと思われる名前ですが、たくさんの子供を養う力を得るためか、夜叉の本能であるのか、彼女は人間の子供をさらい、食べてしまう存在でした。人々は、恐怖に震え、子供をさらわれてしまった家族は、深い悲しみに沈みました。

そのような状況をみたお釈迦様は、一計を案じます。夜叉は、たくさんの子供の中でも、とりわけ末の男の子を可愛がっていましたが、お釈迦様はその子を、自分の食事用のお椀の中に隠してしまいます。子供がいないことに気づいて、パニックになった夜叉は、息子を血眼になって探し求めますが、見つかりません。

やがて、お釈迦様のもとにたどり着きます。お釈迦様は、取り乱した様子の彼女にこう諭しました。

「そなたは、大勢の子を育てていると聞いている。その中のわずか一人を失うだけでも、こんなに悲しみ^{なげ}嘆いている。数人の子供しかいない人間の親が、その子を失って、どれだけの悲しみを味わうのか、わかったであろう。」

そう言って、息子を彼女の元にかえしました。夜叉は深くその言葉をかみしめ、お釈迦様の教

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

えにめざめ、仏教を守護する神となったといえます。

この鬼子母神の神話的エピソードは何を私たちに伝えているのでしょうか。鬼子母神が、自らの子供を養うために、人間の子供をさらい、食べてしまうという行動は、自己中心的な思いや行いの象徴であると考えられます。本能的である分、自己中心性は根深いものでしょう。そこにお釈迦様は智慧の光を当てたのだと思います。

それは、私たちはつながりあい、支え合う存在として生きていて、それ故に、相手の立場に立ち、相手の心に思いを寄せる必要があること。根深い自己中心性に気づき、それをコントロールしていくこと、だと思います。お釈迦様はそのことを、息子を隠すことによって、夜叉に気づかせようとしたのだと思います。自分の行動を、深く悔いた夜叉は仏教を^{まも}護り、自分の子供だけでなく多くの子供たちを護る鬼子母神に変容するのです。

子供を抱き、右手に^{まよ}魔除けの果物といわれる^{きちじょうか}吉祥果を持った鬼子母神の姿から、そのようなことを受けとれるのではないのでしょうか。

— 終 —